

児童生徒の

生涯学習



を高める

教育課程の編成



研究主題設定の理由

私の応援計画

本校では、本人が主体となって作成する個別の教育支援計画を「私の応援計画」と名付けて教育課程編成の中心に据え、関係者と連携した支援を行うためのツールとして積極的に活用している。この計画は、児童生徒が「夢」や「願い」、「目標」を教師や保護者との対話の中から見だし、自分のよさや長所に着目しながら作成するものである。

学びの主体は児童生徒自身

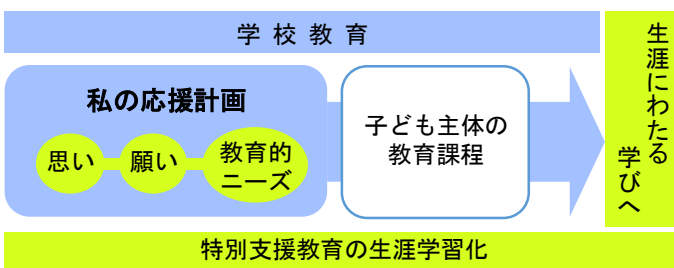
「私の応援計画」を活用した教育課程編成の新しいシステムが構築されたことで、児童生徒自身が学びの主体者であるという意識が高まった。

本校のニーズより

本人、保護者、教師、地域、関係機関が一体となって、卒業後の社会生活を見据えた「生涯学習」という視点での教育活動を充実させるためには、学校生活の中でどのような力（資質・能力）を育むべきか見極めることが重要である。児童生徒の在学中の姿だけでなく、学校卒業後の姿（働く・暮らす・楽しむ）も視野に入れるべきであると考えた。

社会的背景

平成29年4月に文部科学大臣メッセージ「特別支援教育の生涯学習化に向けて」が出され、障害者の生涯を通じた多様な学習活動を支援するための取組が開始された。学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議報告「障害者の生涯学習の推進方策について－誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を目指して－」では、学校教育における学びと学校卒業後の学びを接続し、生涯にわたって学び続けられるようにすることの重要性や、学校教育から卒業後の学びに円滑に移行するために、個別の教育支援計画活用の仕組みを強化する必要性などが述べられている。



以上のことから、本校における個別の教育支援計画「私の応援計画」の活用が、生涯にわたる学びのためのツールとなる可能性があると考えた。

生涯学習力

主体的にヒト・モノ・コトに関わり 生涯にわたって学びに向かい 成長しようとする力

研究の内容と方法

3つのワーキンググループによる研究

研究初年度（平成31年度） ※平成31年度研究紀要第46集参照



リサーチグループ

生涯にわたって主体的に学び続けるために、学校で学んだことの何が活用され、何が必要かを明らかにするため、卒業生を対象にした調査を行い、結果を考察する。



資源活用グループ

生涯学習を行うには、地域資源の活用が不可欠である。本校が関わっている地域資源を整理するとともに、さらなる活用のために何が必要かを考察する。



MIグループ

自ら学びに向かうには、得意な学び方で十分に学習した経験が重要である。児童生徒個々のよさや長所に着目し、「MI（マルチ知能）」を活用した授業づくりを行う。

研究2年目（令和2年度）

卒業後の暮らしにつながる

「はたらく（仕事）」

「くらす（生活）」

「たのしむ（余暇等）」の3観点で子どもの学びを見直すことにした。

「夏のセミナー」

講演：平井 威 氏

明星大学客員教授

「公開研究協議会」

講演：引地達也 氏

みんなの大学校長



はたらくワーキンググループ

目的

昨年度の研究から、本校高等部生徒の43%が「作業学習や現場実習などで働くことを学びたい」「いろいろな職場を知りたい」と回答した。また、卒業生の多くが、在学中に役立った学習は「作業学習」「進路学習」と答えている。はたらくWGでは、働くことに関する学びのニーズの高さと、豊かな生活の基盤となる、仕事を続けていく力の重要性から、「働く」視点で生涯学習力を高める教育課程について考える。

研究の内容と方法

1 「働く」視点で考える生涯学習力

はたらくWGでワークショップを行った結果、「働く」ための要素は「自分で立てた目標に向かう」「役割を果たす」「誰かの役に立つ」と大きく三つに分類することができた。そして、その基盤には「働く意欲」が欠かせないことを確認した。

2 「働く意欲」を高める授業づくり

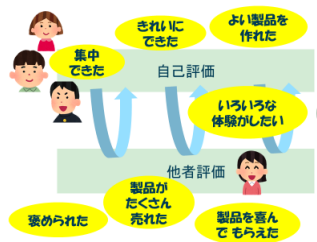
本校の生涯学習力を高める授業づくりのポイント「かかわる」「きづく」「やってみる」から、はたらくWGでは「きづく」に着目して全校授業研究会を実施した。全校授業研究会では、働く意欲を高めるための「きっかけや背景」「働く意欲につながる視点」について、ワークショップを基に他学部の視点から意見交換、協議を行い、研究協力者から講評をいただいた。

3 「働く意欲」を高める要因の検討

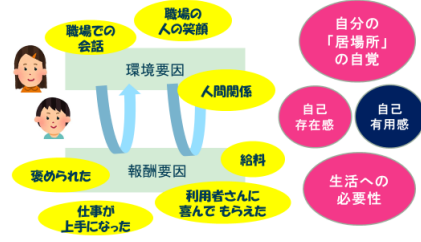
(1) 在校生と卒業生へのインタビュー分析

「働くことは好きか、嫌いか。その理由は何か?」「どんなことがうれしいか、辛い。その理由は何か?」「もっと頑張りたいことはどんなときか?」の項目で質問を行い、その答えを分析した。

在校生のはたらく意欲を高める要因



卒業生のはたらく意欲を高める要因



(2) 他校の実践から見てきたこと (夏のセミナーより)

「〇〇のために〇〇しよう」と生徒が活動する上で目的や楽しみをもてるような工夫

(例: 自分の未来予想図の作成, 学習が地域とつながっていることの実感, 働く目的についての話題提供)

生徒の「気付き」を深める工夫

(例: 自分の強みを考える学習の計画や実施, 様々な対応について考える機会の設定, 気付きの発言の記録, ロールプレイを通じた学び)

自分で立てた目標に向かう

- ・自分のやりたいこと、夢のために今何ができるか、どんな力を高めたらよいか、教師と保護者と一緒に考える機会の設定(「私の応援計画」活用)
- ・少し困難で達成感を味わうような適切な課題の設定(前時の課題を生かす)
- ・上手にできた、レベルアップしたことに気付く手立て(即時評価、見やすい評価表、映像)
- ・自己評価+他者評価による振り返り→繰り返しの足跡を残す(日誌、ポートフォリオ)

働く意欲

役割を果たす

- ・「〇〇のために」の目的の明確化
- ・自分たちで役割を選択
- ・自分の役割が分かるような係一覧表の提示
→工程ごの担当者or一人で最後まで取り組む手順表
- ・目標数、製作数分かる出来高表の提示
- ・振り返り場面で役割を果たしたかの確認

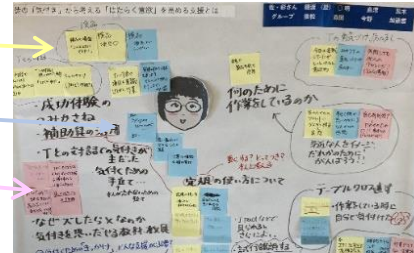
誰かの役に立つ

→導入→〇〇さんに喜んでもらうには、何をしたらよいか、など相手の立場を考える。
〇〇のために△△しよう、など課題の設定
→活動→他の人のためになる行動をする。困っている人を助ける。
→評価→相互評価の場を設ける。互いのよいところを伝え合う。外部の方から評価を受ける。

気付きが見られた場面

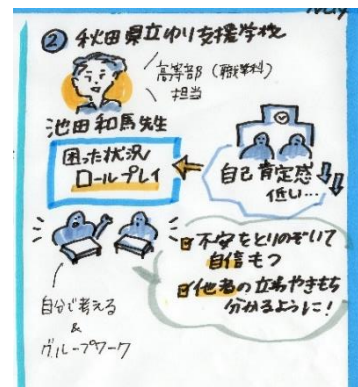
気付きの背景きっかけ

働く意欲につながる場面



在校生は、他者からの評価が意欲に結び付いているケースが多く見られた。

卒業生は、環境要因や報酬要因も影響していた。一名の卒業生は「働くことは好きでない」と話しながらも、「自分の居場所」「実生活への必要性」について言及し、それが「働き続ける意欲」に結び付いていることが明らかになった。



くらすワーキンググループ

目的

「くらす」を切り口にし、生涯学習力を高める教育課程の編成に必要な要素や体制づくり、次年度の高等部の教育課程について提案する。

研究の内容と方法

1 くらすワーキンググループでの検討

(1) くらすワーキンググループの方向性

学校で扱っている学習内容、育成する力について、学部ごとにまとめたところ、「くらす」に関わる学習内容は「衣」「食」「住」「人間関係」に分類できた。次に、社会人の一日の生活に着目し、行動を洗い出した。この二つを挙げた段階で「くらす」に関わる内容は幅広く、多岐にわたることが分かった。そこで、くらすWGでは「みんなが使える場所の利用」をキーワードに、テーマを四つに絞り込んで検討を行うことにした。

また、高等部生徒に対して、公共施設等に関わるアンケートを実施した。公共施設の認知、利用状況ともに、学年が進行するにつれ高くなる傾向が見られた。今後の利用希望に関しては、利用を希望する理由を右の四点に分類することができた。アンケートから、在学中の学習や先輩や友達などの存在の大切さ、「みんなが使える場所」について、WGで検討していく意義を確認することができた。

「くらす」の内容	生涯学習	生徒の学び	教師の思い
<ul style="list-style-type: none"> 学校で扱う内容や社会人の行動は、幅広く、多岐にわたる 地域での行動に着目する 	<ul style="list-style-type: none"> 地域生活での、人との出会い、つながり、関わりを充実させ、自分のくらしをよくしていくとすることが大切 	<ul style="list-style-type: none"> 「くらす」JWG⇔高等部 ・Dスタディの主眼は、問題発見、問題解決 ・学校で習う、体験する ⇒ 家庭生活でも利用する 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域生活への興味、関心を広げたい ・地域との上手な関わり方を知ってほしい

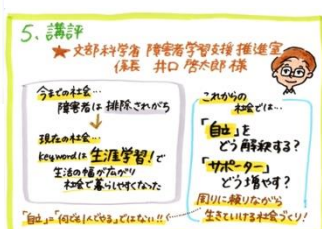
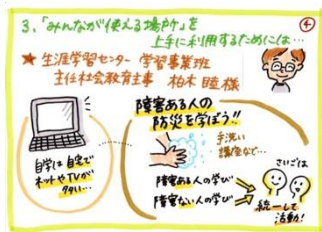
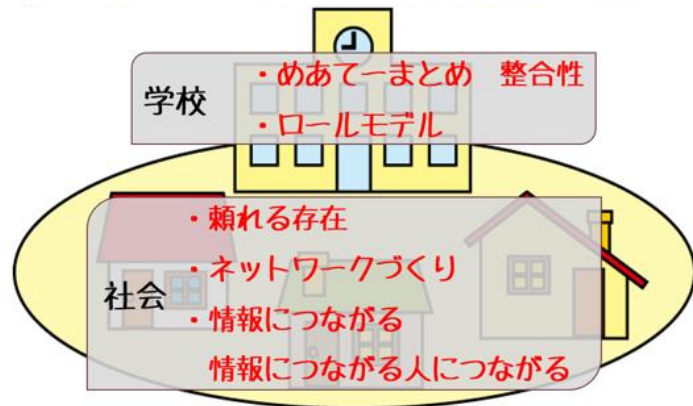
「みんなが使える場所」の利用

<p>これまで、家族が行っていたため、必要性がなかった。 (DVD借用、衣服購入等)</p> <p>必要性</p>	<p>学校の学習や友達と一緒に経験したことがある。 今度は一人で行ってみたい (カラオケ、バスケ等)</p> <p>経験</p>
<p>友達や先輩と一緒に利用したい。友達や先輩が利用しているのでしてみたい。 (食事、映画館等)</p> <p>人との出会い</p>	<p>やりたいことはあるが、どこでやれるかわからない。 (体を動かす等)</p> <p>情報</p>

(2) 夏のセミナー

各分野の方々に参加いただき、卒業後の支援内容の情報「『みんなが使える場所』を上手に利用するための」の話題提供をいただいた。参加者との意見交換では「情報発信」「人とのつながり」「ロールモデル」について意見を深めた。

下図に示すように、学校においては「めあてとまとめの整合性」を高めることや、「ロールモデル」が存在することが重要であること。社会においては、頼れる存在があることや、ネットワークづくり、情報につながることで、情報につながる人につながるということが分かった。



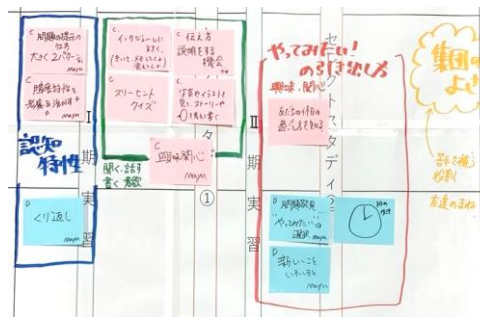
2 授業づくり

(1) つながりミーティング（高等部，くらすWG）

今年度新たに開設した学習「Dスタディ」について検討する機会を設定した。ミーティングを通して出された意見を集約すると、以下の四点である。

失敗してもやってみる機会の設定

意図的に他者と関わりをもったり、用事を果たしたりする機会の設定
経験を広げる機会（直接体験する場面，人の経験を知る場面）の設定
児童生徒が自分で考えられる機会の設定



(2) 授業づくり検討会

単元を通して、生徒がめあてを意識し、必要感を感じながら学習に臨めるような単元を展開し、手立てを検討していくことにした。

(3) 全校授業研究会

それぞれがやりたいことや行ってみたい場所を出し合い、計画を実行するために必要な事柄を学んだり、実践したりするという展開を行った。生徒たちの「うまくいった」「次は〇〇をやりたい」という満足感や意欲の高まりが多く見られた。協議では、以下の点が主な話題として挙がった。

ヒト、モノ、コトとつながる、関わることの重要性
ゆるやかなネットワークを構築する必要性

(4) 授業実践

小・中学部でも高等部Dスタディと同様の授業実践を行っている。各学部で「みんなが使える場所」の利用や、自分たちの希望や考えたことを地域の方と関わりながら実現する学習を展開している。



3 くらすワーキンググループの提案～「ゆるねっと」の作成と活用～

「ゆるやかなネットワークづくり」が生涯学習力を高める上で重要な要素であると言える。そこで、卒業後も活用できるネットワークを構築していくための素地づくり、そして各学部で構築しているネットワークを共有する体制づくりを提案する。以下の六点を「ゆるねっと」実現のメリットと考える。

人が変わっても持続可能な、地域とともに学ぶ体制
新任教師でも、地域に根ざした授業をスムーズに計画可能
昨年度の地域資源をまとめた研究成果の利活用
他学部とのつながりの薄さという本校の課題に対する解決の一助
上学年の学習が分かり、児童生徒のロールモデルをつくる手立て
生徒のアイデアを授業に生かす手立て

在学中から、ネットワークづくりに向け



体験をする必要がある

「ゆるねっと」使用例



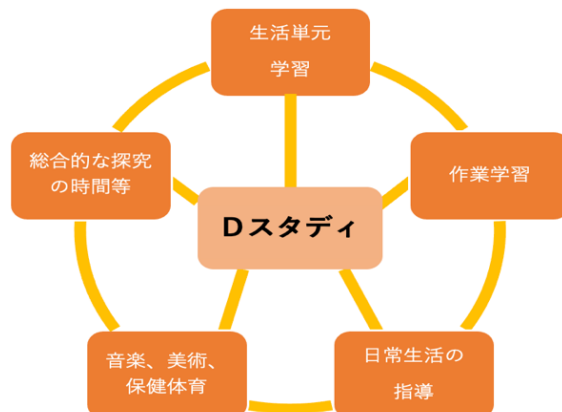
4 教育課程の方向性

(1) Dスタディ

1コマ（50分）ずつの実施は、生徒にとって分かりやすい学び方となったとの評価から、次年度も継続する。一方で「みんなが使える場所」の訪問、利用を考慮すると1コマでの実施が難しいため、年間通して3コマ連続の学習時間を定期的実施する。

(2) 高等部の教育課程

Dスタディで学んだことを他の学習でも生かすという学習の結び付きを強化していく意図から、次年度はDスタディを高等部の教育課程の核と捉え、学習内容を調整したり追加したりして教育課程を組んでいく。



たのしむワーキンググループ

目的

「楽しむ」視点から生涯学習力を高める教育課程について考える。

児童生徒が今もっている「楽しむ力」と、今後必要となる「楽しむ力」を明らかにし、児童生徒の生涯学習力を高める教育課程を編成するために必要なことについて検討する。

研究の内容と方法

I期	「楽しむ力」という言葉の捉え <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ「楽しむ力とは？」 ・LLミーティング ミニビデオ研修会 生涯学習力「楽しむ力」についての研修会 夏のセミナー「楽しむ力を育むために必要なこと」
II期	生涯学習力を育む授業実践 <ul style="list-style-type: none"> ・授業づくり研修会の実施、生涯学習奨励員の活用

研究の実際

1 I期 情報収集・分析

(1) 「楽しむ力」という言葉の捉え

付箋紙を用いたワークショップを行い、「楽しむ」という言葉からイメージされる活動、力、児童生徒の様子について、意見を出し合った。また、ミニビデオ研修会では児童生徒がどのような場面で楽しんでいたら、どのように楽しみを見つけていたら、心の動きを推察した。

これらから、楽しむには「楽しい活動」と「活動そのものを楽しむ力」があることが分かった。また、楽しむ力には没頭したり、夢中になったりする力など「自ら活動に向かう原動力になる力」と「人とつながり、集団の中で発揮される力」があることを共通理解し、研究を進めた。



(2) 生涯学習力「楽しむ力」についての研修会

夏のセミナーでは、生涯学習に関連した教育活動として二校の事例発表と、研究協力者によるシンポジウム「楽しむ力」を育むために必要なこと」を行った。

夢や願いが実現されている状態は、「楽しむ力」が発揮されている状態

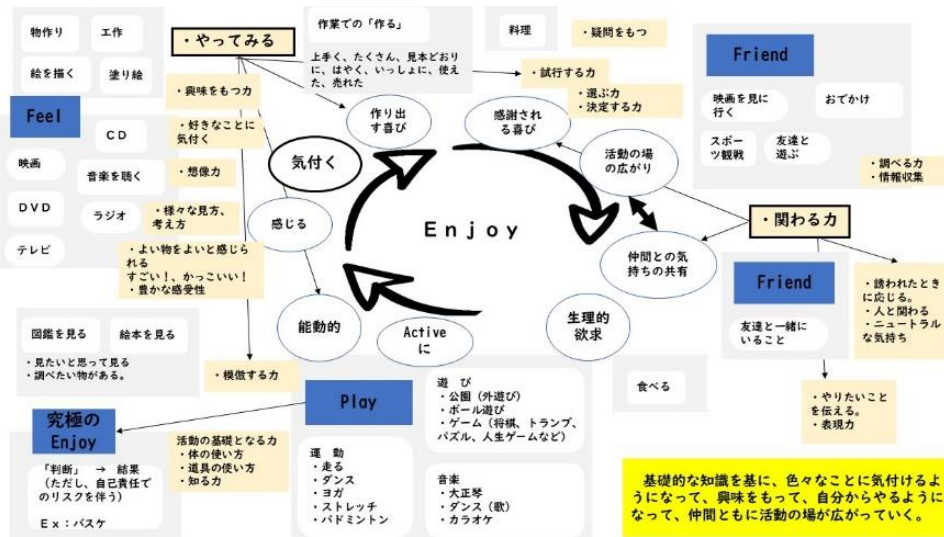
秋田公立美術大学准教授 安藤 郁子 先生

教師も子どもも一緒に、造形活動を楽しむことが必要

秋田大学教職大学院教授 長瀬 達也 先生

学校以外にも「楽しむ力」を培い、発揮できる場がある

秋田県生涯学習センター社会教育主事補 栗田 寿 先生



I期の取組を通して、生涯学習力を育むためには、様々なヒト、モノ、コトに触れながら「あっ!」「おもしろい」「やってみたい」と心が動く経験を積み重ねること、「没頭する経験」、「様々な人との関わり」が特に大切だと考えた。

様々なことに取り組む中で、自分ならではのやりがいや面白さ、楽しさを見つけて深めていくことができる。そこに「様々な人との関わり」が加わることで、新たな発見や気づきが生まれ、そして興味・関心が広がるといふ好循環が生まれる。この循環は、生涯にわたって学び続けるために、重要なことだと考える。



2 II期 実践～生涯学習力を育む授業実践～

(1) 授業づくり研修会の実施

生涯学習という視点から子どもたちの学びを考えたときに、「地域の中で発揮できる力」が育まれているかという疑問をもった。学校の中だけで「楽しむ力」を育むのではなく、今もっている「楽しむ力」をどのように地域の中で発揮できるようにしていくか、地域と一緒にになって子どもたちの「楽しむ力」を育む必要があると考えた。

そこで、「児童の願い」を地域の方と共有し、一緒になって支援について考える授業づくり研修会を実施した。児童が利用している放課後デイサービス職員、地域の生涯学習を推進する生涯学習奨励員等を招いて、「児童の願い」を共有し、それぞれの立場でできることを一緒に考えた。



授業づくり研修会の進め方

- 1 図工の授業中に見付けた〇〇さんの楽しむ姿の紹介
- 2 願いの共有
「将来、地域でこんなふう楽しんでもらいたい」
- 3 願いを実現するために必要な力の検討
(今もっている力とこれから育てていきたい力)
- 4 願い実現のためにそれぞれの立場でできることの紹介



<生涯学習奨励員>
もっと子どもたちと一緒に活動したい。

<NPO法人アートリンクうちのあかり>
いろいろな素材に触れる場を提供できる。

<本校高等部職員>
先輩との関わりの場を設ける。

<放課後デイサービス職員>
職員が学校に来られるようにする。



(2) 生涯学習奨励員の活用

小学部で生涯学習奨励員を招いて、図画工作科「わくわくねんどランド」の授業を行った。児童が様々な表現の仕方に触れたり作りたいもののイメージを広げたりすること、そして、教師が児童の「楽しむ力」や「楽しむために必要な力」を知ることを目的として実施した。



生涯学習奨励員の活用
小学部図画工作科
「わくわくねんどランド」



成果

- ・生涯学習奨励員の活動を模倣したり、新たな発想へと広がったりした。

課題

- ・図画工作科のねらいを達成するための支援が不十分だった。

まとめ

学ぶ楽しさの実感

様々なことに触れ、心を動かす経験を積み重ねる中で「楽しから〇〇したい」という思いを味わっておく必要がある。「学ぶ楽しさ」を十分に味わうことが、生涯学習力の基礎をつくることになると考える。

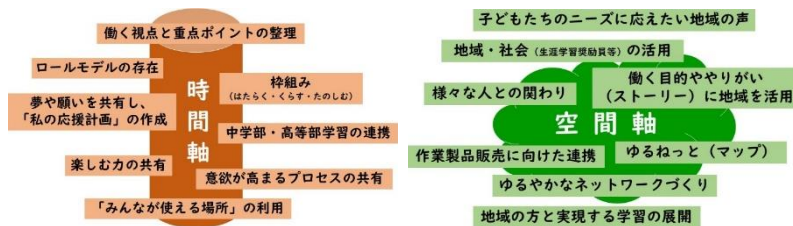
「地域と共に」子どもたちの学びを支える

「地域」を十分にイメージできるようにしたり、必要に応じて地域の力を活用した取組を行ったりすることが、生涯学習力を高めるために必要である。



教育課程編成への提言

三つのWGや各学部の話合い、実践から見てきたキーワードを「時間軸」「空間軸」の二つの軸で整理した。



「時間軸」では、小学部・中学部・高等部という時間の流れ、児童生徒個々の成長につながるキーワードが多い。これらは時間の経過や学習によって積み重なっていくが、積み重ねの機会を教育課程の中に意図的に入れ込むことでより効果的に積み重ねられる。

「空間軸」では児童生徒、学校を取り巻く環境、地域社会という空間的な広がりに関するキーワードが多い。児童生徒の「生涯学習力」を高めるためには学校がどんどん地域に開かれて、地域と結び付けていくことが大切である。

これら2つの軸を、木の幹をイメージした「学びの積み重ね」と木の枝葉をイメージした「学びのネットワーク」とし、本校の教育課程編成のベースである「私の応援計画」の上に重ねると右のようになる。この図を、児童生徒の「生涯学習力」を高める教育課程編成のイメージ図とした。



成果と課題

成果

全職員が教育課程を編成するという高い意識で研究に参加することができた。

学校卒業後の姿を含めた検討により、職員一人一人が生涯学習についての理解を深め、広い視野で教育課程編成を考えることができたとともに、実践場面で児童生徒の主体的にヒト・モノ・コトに関わり学ぼうとする姿をたくさん見ることができた。

今年度の研究を生かし、来年度実践していく教育課程は次のとおりである。

課題

各WGの研究内容が多いことと、WGごとに進め方が異なったために、十分に共通理解できなかった。

授業づくりや児童生徒の変容を検証する場面が少なかった。



興味・関心を広げ、余暇の充実につなげたい
豊かな人との関わりを通して、楽しむ力を育みたい

小学部

Enjoyタイムの新設

生涯学習奨励員の活用



働く意欲を高めるストーリーをつくりたい
自分自身を知るための気づきの機会を増やしたい

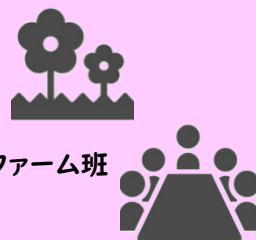
中学部

作業学習作業班の再編成

クラフト班、ハーブ加工班、紙工班

⇒クラフト班、ソーイング班、ファーム班

中高生徒代表者会議の設定



自ら課題に向かい、解決しようとする力を育てたい
何につながる学習か意識できるようにしたい

高等部

問題発見・解決型学習
「Dスタディ」の新設

教育課程の枠組みを
「はたらく」「くらす」「たのしむ」に変更



地域と共に子どもを育て、共生社会を目指したい
地域を知り、地域を活用するためのツールを作りたい

全体・その他

地域の積極的な活用

マップの作成と活用





秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 第43号 別冊
附属特別支援学校・令和2年度研究紀要 第47集 抄録

印刷・発行 令和3年3月
発行 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校
〒010-0904 秋田市保戸野原の町7-75
TEL 018-862-8583
FAX 018-862-8525
HP <http://www.sh.akita-u.ac.jp>
Mail fuyo@sh.akita-u.ac.jp

※研究紀要本文は本校HPを御覧ください。